

美術科学習指導案

指導者 山本 英美

日時 平成 27 年 11 月 21 日 (土) 第 2 校時 (11:05~11:55)
年組 中学校第 3 学年 2 組 計 40 名 (男子 20 名, 女子 20 名)
場所 中学校美術教室
題材 表現 交感 美術鑑賞

題材について

美術科の目標は、豊かな情操を養うことである。「鑑賞」において既存の知識の習得はそれ自体が目的ではない。それぞれの生徒の発達段階や学習経験の深まりに応じて、様々な知識や美術的な理論、作家のエピソードや生き方などに触れる経験が、疑問や共感や考えを生み出し、個々のアイデンティティを構築し、社会の中で自分らしく生きることにつながっている。

本題材では、人物について描かれた作品を取り上げる。4 点の作品はすべて「人のカタチの表現」と「人の内面の表現」について触れることができるものだが、その表現方法は作品ごとに大きく異なっている。そもそも人物画に対する美術的認識は、産業革命以前と以後で大きく異なっている。この時代、写真技術とチューブ絵の具の発明によって写実主義の流れが終わり、印象主義へと移行していく。ものごとの側面や一瞬の輝きを表現する印象主義の流れは、ジャポニズムと呼ばれる日本趣味の流行やキュビズムや抽象主義の登場へと移り変わり、人物画を肖像として捉えるだけでなく、画面構成の要素としてのカタチや内面の表現へと変えていった。

授業内で取り上げる人物画は、『自画像』ではないが描き手の内面や表現の特徴が色濃く表れているため、印象派から近現代の美術史の最後に位置付ける作品としてふさわしいと考えた。

本学級の生徒は 3 割が東雲小学校出身者である。9 年間の学びを通して「観る」楽しさを身につけている生徒も多く、興味を持って鑑賞に参加できるものと考えられる。しかしながら 3 年生という年齢は思春期という成長の途中過程であるため、「どう思うか？」などの答えのない問いかけに対しては自分の考えが他人にどう受け止められるのか不安であることから、発表するのは苦手だったり恥ずかしいという生徒も多い。

そこで指導にあたり、まず作家の情報を最初に与えることとした。画家の言葉は会話形式のものや、思いついたことを書きとめたものを意図的に提示している。作品そのものに対する論評ではなく対談やアイデアノートの中で作家が自分自身について語ったり、考えを示しているため、作品に対しても疑問や興味、共感を持ちやすいと考えた。言葉の意味や会話の中身についてお互いに意見や感覚、情報を交わしながら、最終的にはタイトルを自分なりに考えることで作品を評価する。作品が表現しようとしているものや描き手の内面、自分自身の内側にまでもせまっていけるような学習の場をつくりたい。なお、画家と画家の言葉についての詳細は別紙で示すものとする。

指導目標

制作過程や画家の言葉に注目し、お互いに意見や感覚、情報を交わすことでより深く作品を鑑賞できるようにする。

指導計画

1. 印象派 (写実主義から印象主義へ)
2. 印象派とジャポニズム
3. 近代化する美術
4. 現代の美術 (本時)

本時の目標

絵にふさわしいタイトルをつけることができる

準備物

鑑賞用図版，付箋（色違い3色），イメージ図シート（グループ用），画家の言葉資料

「グローバル時代をきりひらく資質・能力」の視点

美術史を学ぶとき，そこには世界史との密接な関わりがあることがわかる。特に近代から現代にかけては経済のグローバル化により世界中のあらゆる情勢が，ほとんど全ての芸術活動に影響を及ぼしている。美術科では芸術は自由であるがゆえにあらゆる物事を内包し，多様な広がりを見せ続けるという前提のもとに，鑑賞の学習を通しこれらを追体験したりタイトルとして表現したりすることで主体性や多様性を身につけることができると考える。また，自分の考えや感覚を伝えあうことは双方向的な活動であり，共に学び影響し合うことから協働性を生むことができると考えた。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
<p>1. 導入と展開（20分）</p> <p>□4人の画家の言葉を読み，わからない言葉，気になる言葉，共感できる言葉にしるしをつける。</p> <p>左から「肖像（ゴッホ）」森村泰昌 「眠れない夜」奈良美智 「飛べなくなった人」石田徹也 「世界中の子と友達になれる」松井冬子</p> <div data-bbox="209 1243 1445 1496" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  </div>	<p>○後から見てわかりやすいよう，色分けさせる。</p> <p>○わからないが気になる，など言葉の分類が難しい場合には発言を聞き取り，二重に分類させるなどの提案をする。</p> <p>◆画家の言葉を読み取り，自分の意思を反映できているか。</p> <p style="text-align: right;">【関心・意欲・態度】 【鑑賞】</p>
<p>□画家の言葉の中から，一番興味があるものを一つ選び，画家ごとにグループに分かれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イメージ図シートを受け取る。 ・グループごとに机を移動させる。 	<p>○人数が偏った場合も調整は行わず，作業や話がしやすいよう机の配置を工夫させる。</p>

<p>2. 展開（25分）</p> <p><input type="checkbox"/> グループ内で画家の言葉についてイメージシートに記入する。</p> <p><input type="checkbox"/> 鑑賞用図版を受け取り，それぞれの画家の作品を見ながら気づいたことや感じたことなどを付箋に書き出し，画家の言葉や作品について話し合う。</p> <p><input type="checkbox"/> 画家の言葉と作品を関連づけながら、絵にふさわしいタイトルをつける。</p>	<p>○共通する部分や捉え方の多面性に注目させ，疑問や興味，共感を促す。</p> <p>○付箋に書き出させることで，全員が自分の考えを示すことができるようにする。</p> <p>○各自が考えてタイトルをつけることで，考えをまとめることができるようにする。</p> <p style="text-align: right;">【発想・構想】</p>
<p>3. まとめ（5分）</p> <p><input type="checkbox"/> 画家について知る。</p>	<p>○画家の他の作品を紹介し，興味や関心を深める。</p>



森村泰昌は80年代後半から、ゴッホ、ベラスケス、マネなどの名画を模し自らその主人公に仮装した写真で一躍有名になり、90年代頃からは、有名女優、歌手などに扮した作品も制作し、自画像の世界を広げている作家である。その作品は時代、性別、人種の壁を超えた自画像表現として、また写真を巧みに手段に取り込んだ作品として、国際的に高い評価を集めている。

画家の言葉①（森村泰昌）

「棟方志功の『わだばゴッホになる』という本があります。あれは自分もゴッホのような画家になるぞというあこがれの対象のゴッホですが、私のゴッホは何とも情けなくて痛いゴッホです。じっと見て、帽子や服を作った。使い込まれたコートと防寒用の帽子。実際には柔らかい素材のはずなのに、僕にはどうしても軟らかく見えなかった。もっと刺々しく見えた。だから服は布ではなく粘土で作り、帽子には釘を刺した。粘土の服に色を塗り、自分の顔にも色を塗り、もうドロドロになってこれ以上近づけないところで、包帯を巻いて写真を撮りました。

「自分の顔をキャンバスに絵を描いて、服は重くて、帽子も耳も痛い。何だかゴッホさんと一緒に落ちるとこまで落ちていくみたいで、何でこんなことを自分はやっているんだろうと思う。何がどうなるのかもわからない。ふと我に返ると何だか情けなくなったりして。一枚の絵の中には画家の心と身体が乗り移っている。そこに侵入していくわけです」

「核になるところが見つからない。何をやってもこれは自分じゃない。自分がどこにもないと思っていたけど、でも、迷っている自分が確かにここにいるじゃないか。迷っている自分を核に、これまでやってきたことすべてを寄せ集めたら、トータルなひとつの世界になったという感じですねえ。自分の中の総合芸術です」

「本が焼かれるなど言論や表現の自由が奪われるというのが一方にあり、もう一方には沈黙の深さがある。いろいろと話したり行動する人がいる一方で、あえて話さない道を選んだ人、絶句して何も言えなかった人など沈黙している人がいる。でも、沈黙の広がりや情報は情報化社会では記録されない、反映されない。黙っているとゼロ。それが忘却の海。表現というと、語る、書く、描く、形にすることだと思うけど、逆の場合もある。絵にも言葉にもならない世界もある。」

吉永みち子『この熱き人々』2014年08月15日（Fri）

WEDGE Infinity



奈良美智の作品は、挑戦的な眼差しの子どもの絵がよく知られている。奈良はその眼差しについて、「小さいころの自分が大人を見ていた目つき。」とコメントしており、作品からは画家の幼少期の内面性が見て取れる。本題材で使用する「眠れない夜」は、2012年度横浜美術館での企画展、「奈良美智：君や僕に ちょっと似ている」に合わせて、同時期にサルバドール・ダリを始め、代表的な所蔵品として人気の高いシュルレアリスムの作品において表される人の形、明治期から現代までの日本画における人物表現、秋山庄太郎や木村伊兵衛らによる女優や文豪などのポートレート写真などと共に同館コレクション展で展示されたものである。

画家の言葉②（奈良美智×篠原ともえ）

篠原 私、絵の道具は持ってたけど、やり方とかわかんなかったんです。今日、やっと、それがわかりました。

奈良 やってみると、簡単だったでしょ。

篠原 うん。シノハラ、今日から画家です（笑）。でも、先生の絵ってモデルがいるんですか。

奈良 いないよ。モデルがいると描けないんだ。僕、小さい頃、鍵っ子で、しかも友達が周りにいなかったから、僕の絵には、その頃の寂しい思い出がいっぱい出てくる。

篠原 じゃあ、先生の絵の子供たちの目つきは？

奈良 それはね、ちっちゃい頃の自分が大人を見てた目つき。

篠原 わあ、なるほど、怖い子供だ（笑）。じゃあ、先生の絵ってどうして女の子ばかりなんですか。

奈良 それはね、髪型とか服装の問題。女の子だと、髪型や服装でいろんなバリエーションが出せるから。

篠原 大人が嫌いだったんですか。

奈良 うん。今でも、自分は大人だけど、大人嫌い。なんだか世の中のやり方とかよく知ってて、それが嫌だなって。

篠原 なるほど、さすが芸術の人だ（笑）。シノハラもそうなりたい。

奈良 もうなってるよ。僕は職業で画家を選んだんじゃなくて、こういう生き方がしたいから画家になった。だから、売れるでしょ、儲かるでしょ、とか言われるとすごく頭にくる。それは篠原さんも同じでしょ。

篠原 絵のコンセプトとかはあるんですか。

奈良 ない。というか、何もしない時でも、こうして話してる時でも、絵を描いてるよ、じつは。自分の感じたこととか見たこととか思ったことが、全部絵になるから。

篠原 すごい。でも、ほんとにかわいい絵ばかり。篠原も早く絵を描かなきゃ。先生、私、世界一になれるかな（笑）。

奈良 世界一なんて簡単さ。ほんとだよ。人と比べなきゃ、誰でも世界一なんだから。

篠原 先生、シノハラ、ほんとうに今日は勉強になりました。私、今までいろいろな人に会ったけど、こういうふうに画家の人と絵を描くのは初めてで、ものすごく大きな影響を与えてくて、今日はお礼してもしきてないぐらいです。

奈良 僕も同じです。今日のこと、あと10年は仕事頑張れるな、って感じ（笑）。



石田徹也は現代社会を鋭く風刺する画風で知られる画家である。「飛べなくなった人」では飛行機と一体化した人物の異様さに目がひきつけられる。それは石田のまなざしを通して見た現代社会における人々の内面の問題の象徴であり、痛みや矛盾を抱えて生きる人々の表現として、見るものの共感を呼んでいる。

画家の言葉③（石田徹也・アイデアノートより）

— 何を描こうか、考えるとき、目をつぶり、僕自身の、生まれてから、死ぬまでをイメージする。しかし、結果表れてくるものは、人や、社会の痛み、苦しみ、不安感、孤独感などで、僕自身をこえたものだ。それを自画像の中で描いていく。昨年出品したものと比べると、ギャグ、ユーモア、風刺とうけとめられるというものをなくす方向にきています。

— 表現へ戻ろう。デフォルメや、ハッチで描けば、シンプルなものでももつ！
たくさん色をつかう。ベンチャー

— 新しく、方向も求めなければならない。今までやってきたことの中にその方向はあるような気がする。僕らが生きている空間で、問題となっていること

欲望、他者と自己、不平等、生きている実感のなさ、まく、おろかさ、
幼児性、魂、死、救済、不安感、劣等感、教育、仕事、メディア、ニュース、自閉、個室

— わたしが不安感にこだわる理由は、現実を見えるようにするためです。

— 僕の求めている（今）のものは、苦悩の表現であったりするのだが、それが自己れんびんに終わるような、暗いものではなくて、他人の目を意識した（他人に見られて理解されることで存在するような）ものだ。

自分と他人の間のかべを意識することは、説明過剰を生みだすが、そのテーマなり、メッセージが、肉声として表現されているならば、直情的にたたきつけた絵画よりも、ニュアンスにとんだ、コミュニケーションがとれるはずだ。

— 不気味なもの— 抑圧を経て回帰してきた、慣れ親しんだ対象／ならば／不気味なものを考えることは、身近な事物に対する抑圧を考えることになる／どんな抑圧があるのか考える。／幸せになること／自分を責めない

（「なぜ働くのか」、リクルート社内報『かもめ』、2001年11月号、通巻400号より）



松井冬子の作品は人間の中の狂気、見えない美、葛藤、希望、などの要素が含まれている。古典的な日本画の技法で描かれた女性や花、幽霊などは、内臓や身体器官もモチーフにしつつ、自己分析的に「痛み」「狂気」を絵画で追求しており、美しくもおぞましい独自の世界観を作り出している。

画家の言葉④（松井冬子）

子どものころは友達と遊ぶのがほんとうに楽しくて、たくさんの友達がいて、この勢いで行けば大きくなったらきっと世界中の子と友達になれる、と本気で信じていたんです。でも成長するにつれ、そんなことはあり得ないということがわかってくる、その物悲しさがあります。それに現実には大人になったら友達なんてひとりもいないと覚悟することもある、けれど大人の間として社会生活を平気で営んで行く。そういう矛盾した状況を表わしたかった。つまり、あり得ない言葉、「狂気」にも近い言葉ということですね

グロテスクなものが好きなんです、とよく言われますが、描く対象をグロテスクだと思っていません。人間というものは開いたら内臓が出てくるものなのだから、現実、事実ですね。恐ろしいとか、怖い、というのは別の感情であって、真実を見つめる気持ちで描いています。「狂気」というのも人間にとっての真実です。

たとえば私の作品に「幽霊画」がありますが、実は幽霊画は日本画のカテゴリー外の庶民の文化で、江戸時代には幽霊画を一家に一巻持っていました。主人の留守中にかけておけば泥棒が入ってこないという厄よけの意味を持っていたようです。

（『ヨコハマ・アートナビ』，2011，12月号より）